

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390810044		
法人名	医療法人 回生会		
事業所名	グループホーム ソーレ		
所在地	熊本県山鹿市古閑1160-1		
自己評価作成日	令和3年2月16日	評価結果市町村受理日	令和3年5月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	令和3年3月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念でもある「その人が自分で決める権利」を大切にしています。スタッフ一人ひとりがスタッフ本位で物事を考える事ではなく、そこにその人本人の意思や思いがあることを念頭におき、その人のあたりまえの生活がその人らしく送れるようにケアを行っています。まだまだ1年目の施設ですが、ご本人・ご家族や、スタッフ、関わる全て人が「ソーレで良かった」と思えるホームを目指しています。地域への貢献が少ないのが現状ですが、それぞれの利用者が暮らしてきた地域との繋がりがいつまでも継続できるようお手伝いをしていきたいと考えています。また年月を積み上げていくなかで、当ホームが地域にとってなくてはならない存在になれるよう、地域との関係を築いていきます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍という非常時での事業開始のため、計画通りの運営が困難な中、基本理念・基本方針・職員の行動規範を明確に定め、「入居者の自己決定の支援」を大切にケアの実践に取り組んでいる。地域との交流・外出支援等、出来ないことも多いが、屋内では、家庭的で美味しい食事・心地よい入浴等、一人ひとりの想いやペースを大切に生活の支援が行われている。イタリア語で太陽を意味するというホーム名ソーレ(Sole)のように、明るい日差しのもと入居者と職員が地域の人々と交流しながら入居者の暮らしを支援するグループホームとして、また地域の人々を支援する福祉の拠点として、将来の姿が楽しみな施設である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設時に、スタッフそれぞれの想いを書き出しそれを基に理念を作成している。1年目であるため、利用者の暮らしや日々のケアの基本として実践に心掛けている。	「どのようなホームを目指すか」について職員全員で話し合い、利用者の自己決定を支援することを基本的な考えとして、理念・基本方針・職員の行動規範を作成している。	ホーム名：ソール(Sole)についての謂れや説明がパンフレット等に記載されていると、ホームのイメージがより分かりやすいと思われる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームがある地域との関わりや、利用者が暮らしてきた地域とのつながりを継続したいと計画しているが、コロナの影響を受け地域との関わりはできていない。10月から地域の神社掃除に参加できるようになった。	開設準備を行う際、区長・民生委員・近隣住民等を対象とした住民説明会を実施し、地域密着型事業やグループホームについて説明し、理解と協力を得るための取組を行っている。開設後は、入居者と共に地域住民として行事への参加や交流を計画していたが、コロナ禍のため現在は交流を控えている。コロナ収束後の交流を楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	行事等を通じ、地域の方と入居者との関わりの中で認知症者への理解や、認知症者を介護する地域住民のコミュニティーの場として活かす事を計画していたが、コロナの影響にて実践することができていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの活動や利用者の暮らしなどを写真や文書で報告している。実際、ホームでの開催はコロナの影響で場所が確保できずできていない。書面での報告で意見や感想を頂きながら、サービスに活用している。	区長・民生委員等地域を代表する人々を訪問し「運営推進会議」について説明し、委員への就任を依頼している。コロナ禍のため開設前の内覧会も実施できず、対面での運営推進会議は開催されていないが、職員を写真で紹介したり、2か月ごとに利用状況・活動報告・研修会・事故報告・身体拘束適正化検討委員会報告等を書面で配布し、委員から意見等を得るなどして運営推進会議の実施としている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者とは日頃から連絡をとり、協力関係を作っている。直接窓口に出向き相談など意見交換を積極的に行っている。ホームの現状を報告し助言等をいただくようにしている。	市の長寿支援課には、人員配置等で課題が生じそうな時は率直に相談し、助言が得られるような関係構築のため、日頃から積極的にコミュニケーションを図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設後すぐに身体拘束についての研修会を実施し、身体拘束をしないケアについて理解できている。利用者に対する何気ない言葉かけや行動が利用者の自由を奪っていないかなどの常に立ち返るようにしている。	管理者は「全ての職員が身体拘束をしないケアについての理解は出来ている」としている。ただ、日頃のケアの現場において何気なく発する職員の言葉が小さな虐待・スピーチロック等につながっていないかを振り返る機会を作り、職員のストレスにも配慮しながら不適切なケアとならないように取り組んでいきたいとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	開設後すぐに高齢者虐待いについて研修会を実施し、不適切なケアが虐待につながっていく事を理解している。スタッフのストレスへの理解、ゆとりある職場環境作りなども合わせて今後は検討していく。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修会に参加し理解できているが、スタッフへの権利擁護に関する制度についての研修会を実施できていない。今後学ぶ機会を設けていく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は時間をかけ説明を行っている。また、入居相談時に可能な限り見学して頂きホームの特色などを理解して頂いている。入居が決まってからも事前に時間をかけて家族や本人と会い、不安や疑問などを確認している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナの影響があり、面会を制限していたり運営推進会議等の参加ができず様々な意見を聞く機会は少ないが、面会時や電話などで家族の意見や要望などを聞き運営に反映させるように努力している。	毎月、入居者の暮らしぶりを写真に撮り、担当者のコメントを添えて家族に郵送し様子を伝えている。面会は制限しているが、評価のために実施した家族アンケートには、「よく連絡や報告があり安心してます」との声が殆どであり、家族の不安に配慮した支援が行われていることが伺われた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に面談を実施し各スタッフの意見を反映できるようにしている。また、日常的に話しやすい雰囲気作りに努め、スタッフの意見を確認しケアの方向性を決めている。	開設以来、コロナ感染症対策等が優先されるため職員参加の定期的なミーティング等が行われていない。管理者は、定期的に職員の個人面談を実施し、理念や目指すホームの姿等を共有すべくコミュニケーションを図り、意見・相談等を言い易いように配慮している。	次年度は定期的に職員ミーティングが実施され、意見や提案が運営に反映される環境となることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	スタッフのワークライフバランスを重視し、働きやすい環境を整えている。休みの希望や、休憩時間の確保、時間外勤務の削減など職場環境の整備を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得制度を導入しており、介護福祉士を取得するための実務者研修等への参加を進めている。外部の研修会への参加機会は少ないため、今後は積極的に参加できる体制を作っていく。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同地区にある他グループホームとの連携、合同勉強会、スタッフ・利用者交流などの取り組みを計画し、質の向上を目指していたが、コロナの影響があり実施できていない。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に可能な限り訪問、本人・家族にホームへ見学に来てもらい不安に思っている事や要望等を細かく聞くようにしている。しっかりと面談を行う事で本人と顔見知りになり少しでも近づき安心感を与えられるように努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には必ずホームに来てもらい時間をかけて面談を行っている。家族の意向や思いを受け止め信頼関係を築く努力をしている。要望や思いはスタッフ間でも情報を共有している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時には十分な時間をとり、入居だけでなくその時必要なサービスの検討や情報提供を行っている。また、入居にいたるケースはリロケーションダメージによる影響について家族に説明し、その時必要な支援について協力をお願いしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者のできること、できていることに視点を置き、これまでの生活や役割を理解しながら共に過ごす関係を築く努力をしている。主に家事等を一緒にやり、お互いに感謝しあえる関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナの影響があり、家族と外出したり外泊したりすることはできていないが、利用者にとって家族の存在は大きい事を伝えている。スタッフとともに一緒に利用者を支えていく事の重要性を伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が大切にしてきた場所や、集まり、家など関係が継続できるように支援を予定していたが、コロナの影響があり本人が望む場所への外出ができていない。	お墓参り・仏壇参り・馴染みの神社へ初詣・地区の行事・参加していたサロンへ出かける等、馴染みの人や場との関係継続を支援したいとしていたが、今年度はコロナ禍の為やむを得ず控えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士のコミュニケーションは大切にしている。お互いの存在が安心材料になっている事もある。それぞれの個性を知り、時にはさりげなく職員がフォローしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約の終了、看取りなど実績が今のところないが、今後サービスが終了しても関係を断ち切らないように、これまでの関係性を継続する取組みを行う予定。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	理念でもある「本人のあたりまえの生活」や「自己決定支援」を大切にしている。本人がどう思っているのかを常に念頭におき支援を行っている。	現在、すべての入居者が言葉で表現できているが、生活歴の情報や、入居時に記載してもらう、本人が「大切にしていること20項目」等を参考にして思いの把握に努め支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時には本人の馴染みのある家具や写真などをもってきてもらいこれまでの暮らしに近い環境を整えてもらっている。個々のこれまでの暮らしシートや大切にしている事シートを活用して把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活パターンは本人に合わせ、一人ひとりの生活リズムに合うように支援している。本人のできること、できていることを把握し、その能力を活かす支援を行っている。日々記録に残し、スタッフ間でも情報共有をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画担当が中心に介護計画を作成してる。介護計画を全スタッフで共有しそれぞれの意見をだしあっているが、定期的なカンファレンスの開催は今後の課題である。	生活歴・本人の大切にしていること・困りごと等を参考に、本人の意向を大切にしたケアプランを作成している。入居時は、本人の訴えや状況を細かく介護記録に残し、ケアプランの評価見直しの参考としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録に日々の様子やアセスメントを記録に残し、職員間で共有し日々のケアにいかしている。本人がどうしたいかを大切にし、思いを聞きながら実践につなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ルールはありながらも、その時々生まれる様々なニーズに柔軟に対応していきたいと考えている。コロナの影響もあり、ニーズがあるときの外出や外泊などの対応に制限をかけてしまっているのが現状。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	それぞれの住み慣れた地域での活動や、現在住んでいる地域行事の参加を予定していたが、コロナの影響でできていない。選挙や美容室などは感染対策をしながらでかけることは出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には入居前のかかりつけ医を継続している。可能な限りスタッフが付き添い主治医と情報交換を行い関係作りを行っている。必要時には電話連絡を行い相談を行っている。	看護師である管理者は受診に同行し、入居者其々の主治医と顔見知りになり、相談しやすい関係を作り、入居者が安心して適切な医療を継続して受けられるように配慮している。また、主治医への相談や医師からの指導は、介護記録に記載して全ての職員で共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤看護師の配置があり、介護職は利用者の変化時には相談できている。緊急時には協力医療機関の看護師と連携できるように体制は整えている。今後必要時には訪問看護との連携も行っていく。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	現状対象者はいないが、利用者が入院した場合には安心してできるように面会や、早期に退院ができるよう関係者との情報交換は蜜に行っていきたい。また、そうした場合に備えてかかりつけ医とは状態変化時の受け入れなどの相談は行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合における指針や、看取りに関する指針、事前書など準備はしているが現状本人や家族に説明はできていない。今後、早い段階で十分な説明と方針を共有したいと考えている。	「重度化した場合における対応に係る指針」 「看取りについての事前確認書」を整備している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時に備えて緊急マニュアルの作成や宿直の配置、AEDの設置などを行っており各自把握はしているが、定期的な訓練は実施できておらず実践力は乏しい。より実践に即した訓練を今後行っていく。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練は消防署立ち合いも含め2回計画して実施している。地域住民も参加した訓練を検討していたがコロナの影響があり実施にはいたっていない。その他の災害時の訓練などは実施できていないため今後の課題。	12月は火災を想定した避難訓練・水消火器操作方法実技訓練を実施し、3月は消防署立ち合いのもと夜間の火災を想定した避難訓練を実施している。今後は、災害時の停電に備えた対策を検討するとしている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみや馴れ合いにならず人格やプライドを傷つけない言葉かけを大切にしている。本人の呼称は事前に本人や家族に確認し、呼び名を決めている。理念でもある自己決定支援を大切に、待つケアを心掛けている。	入居者と親しくなっても、言葉遣いや声の大きさに配慮することを心がけ、言葉が出にくい人、動きがゆっくりの人等、其々のペースを大切に、待つケアの実施に取り組み、一人ひとりを尊重したケアに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活のなかで、自分で決める権利を大切に実践している。洋服や飲み物を自分で選んでもらったり、入浴日を決めてもらったり、利用者の思いに寄り添えるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	理念でもある「その人のあたりまえの生活をあたりまえに支援すること」を大切にしている。職員側の都合を押し付けないようにし、本人のペースに合わせた支援を心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみには配慮し、本人らしさが表れるよう家族に協力を得ている。その日着る服等は本人に選んでもらうようにし、また、化粧の習慣がある利用者にはお化粧を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の能力に合わせながら、食材切り、味つけ、盛り付け、配膳や下膳、食器洗い等を行ってもらっている。また、誕生日には本人が食べたいものを聞きメニューにしている。	食事担当職員がメニューを考えて食材購入し、調理や味付け・味見などは入居者も手伝い、家庭的な料理が提供されている。誕生日は本人の食べたい物が昼食・夕食に出されている。お節料理・ひな祭り・七夕・そうめん流し等、季節の行事食も多い。コロナ収束後は、回転すし・焼き肉・ラーメン等、外食も実施して楽しい食事を支援したいとしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量は随時チェック表を用いて把握している。少ない場合には職員間で共有して摂取量が確保できるように工夫している(ワンプレートや水分ゼリーの活用など)。飲み物はメニューがあり好きな物を選んでもらい提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に必ず口腔ケアを行っている。必要な利用者に対しては職員が仕上げ磨き、確認を行い清潔を保っている。自分で行える利用者に対しては手続き記憶を大切に、能力を奪わないよう見守り等を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェックを活用し利用者の表情、動き、訴えなど常に見守り本人の意向を確認しトイレへ誘導を行っている。トイレに行く習慣が衰えないように、間隔が空いている場合にはプライバシーに配慮しながら声かけを行っている。	トイレでの排泄習慣の維持を支援の基本としている。見守りで十分な人、声掛けが必要な人、其々の状態に応じて排泄の自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食時にヨーグルトやオリゴ糖を提供している。また、散歩などの声かけにより運動を促している。必要に応じて緩下剤(酸化マグネシウム)を調整し自然排便につなげている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴回数や曜日など本人に確認して決めている。入浴をお断りする場合には無理強せず本人の気持ちに寄り添って実施している。入浴時も本人の能力に応じた支援を行っている。	入浴の時間帯や曜日は、本人の意向を大切にしている。入浴は夜に、自分の物の洗濯は自分でしたいと望む人は、入浴中に洗濯して自室で干してもらおうなど、柔軟に対応している。入浴に気が進まないときは、きちんと話し合っ本人が同意しての入浴となるよう心掛けている。コロナ収束後は、本人の希望に沿って馴染みの温泉にも出かける支援をしたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床や消灯は個々の生活リズムに合わせて対応している。なるべく夜間熟睡できるように、日中の生活リズムを整えている。寝付けないときは、無理強いせず、温かい飲み物などを提供したり安心できるように寄り添うケアを心掛けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個別の介護記録に綴じ、効果や容量を確認するようにしている。薬の変更時には介護記録に残し共有している。誤薬を防ぐためにも与薬時にダブルチェックを行うようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	これまでの生活歴を把握し、好んで行ってきた事ができるようにしている。畑仕事や草むしり、食事作りや掃除、洗濯、散歩など個々の役割にあわせながら支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族との外出などはコロナの影響でできていないが、その日の気分によって屋外を散歩(ホームの敷地内)したりドライブに出かけたり個々にあった支援を行っている。	天気の良い日は、庭であおぞら給食をしたり、広い敷地内を歩いたり、近くのサイクリングロードを散歩して外出気分が味わえるよう支援している。コロナ禍ではあるが、近くの神社や不動岩等、人手の少ない場所を選んで外出の個別支援をしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状では自分で管理している利用者はいないが、近くのコンビニ(病院内)の買い物などで財布を渡し支払いを支援するなどしている。コロナの影響がなければスーパーなどに買い物に行き、必要なものを自分で買う支援を行いたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望がある時や必要と思われるときは電話を行っている。手紙のやり取りはないが、家族と交換日記というかたちでやり取りができている。家族とのつながりや大切な人とのつながりを継続するため今後も積極的に支援を行う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常に音や光、湿度、温度など気を配っている。季節の花を飾ったりすることも多い。リビングのテーブルは円形で安全面を配慮、利用者に合わせて高さ調節ができるようになっている。リビングからの眺めは解放感があり、季節を感じながら居心地の良いものになっている。	広く開放感のあるリビングからは、敷地内にある竹林・梅林・桜の木・花壇・自菜園等の眺めが堪能でき、居ながらにして自然や季節の変化を味わえる環境となっている。食堂は高さが調節できる丸テーブルに安全に配慮した椅子や、ゆっくり寛げるソファを置いて、一人ひとりが自分のペースでゆっくりと過ごせる空間となるように配慮されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	対人関係に配慮した席の配置を行い利用者同士で思い思いに語れるようにしている。またソファを配置し独りになれるよう工夫している。窓辺に椅子を置き外を眺めることができる。コロナの影響でアクリル板を設置しているため不自由な場面もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人、家族の希望伺いながら自宅に近い家具・生活用品・写真など持参してもらい、家族に配置を依頼、居心地の良い居室の空間作りをおこなっている。また居室の入り口には本人の好きな色を選んでもらい名札にしている。	入居者の居心地の良さを大切に、家具等の自由な持ち込みと部屋作りを本人と家族で行うことを推奨している。ソファや本、テレビが置かれたり、家族写真・誕生日会の写真や、孫が描いた自宅の絵や管理者作の詩「ネームインポエム」等が飾られており、其々の心地よさに配慮された居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活空間はバリアフリーで安全な動線を確保している。トイレ内、廊下、玄関には手すりを設置している。本人の部屋だとわかるようにドアには本人の好む色で表札を作っている。		